

## 夜の王様 くタイムリミットは三日

名瀬市立小宿小学校 四年 新田 紗紀

やあ、ぼくセル。読書が好きなの小学四年生さ。えっ、男の子が本を読むなんておかしい、だって？とんでもない。ぼくはね、読書好きなおかげで、君の知らない国へ行ったことがあるからね。この事は、誰にも言った事がないんだけど、君にだけこっそり、教えてあげるよ。その日、ぼくはね……

「何かご注文は、ありますか。」

「うーん、いいよ。」

やっぱ、教室よりきつ茶店の方がいいや。静かだし、涼しいし。本を読むにはすごくいい所だよな。みんな、ぼくが本を読んでいると、すぐばかにするんだから。男が本好きで何が悪い！スポーツがきらいで、何が悪い！

「キーン、コーン、カーン、コーン。」

「あつ、やばい、昼休みが終わっちゃー！急いで帰らなきゃ！」

おっと、お次はぼくのきらいな体育だ。どうしよう。まっ、これから教室に行っても、間にあわないからな。よし、さぼっちゃおう！ぼくが、かくれる場所といたら……。図書室しかない！ぼくは、そーっと、図書室をのぞいた。よかった。誰もいない。

「がらがらがら、びっしょん。」

うふふ。誰もいない図書室も、けっこういいな。

「さーて、授業が終わるまで、本でも読もう。」

ぼくが好む本は、たなのおくにある、うすぎたない本だ。そういう、古い本の方が、おもしろい事が多いからね。変かもしれないけど、君の学校の図書室でも、試してみたらどう？ぼくはいつものように、たなのおくに目を付けた。よしよっと。手探りでひっぱり出したのは、

「ん？なんだ、これ？」

題名が書いてない。作者の名前も、何も書いていない。黄色の表紙で、なんだかすいこまれるみたい。とてもきれいな色だけど、なんだかちよっぴり、さびしそう。ぼくは、表紙を開いてみた。

「ん？」

またまた、不思議だぞ？ページをめくっても、まっしろけ。変な本。

「まあ、いいか、家に持って帰ろう。」

「キーン、コーン、カーン、コーン。」

「体育が終わったぞ。」

そーっと、体育館をのぞいてみる。あつ、みんな帰っていたぞ。ぼくは、一足先に、教室に帰らせてもらうよ。大急ぎで教室にもどるぼくは、気づかなかった。かかえている本が、あの冒険につながるとは。

その日の夜、ぼくはなかなか寝つけなかった。なんだか、あの本が気になつてしかたがなかったからだ。ぼくは、机の上の本を手を取った。きれいな色。図書室で見た時よりも、かがやいて見える。ページをめくってみた。

「あれ？どうして？」

絵がかいてある。図書室にいる時、見落としたのかな。次々出てくる見事な絵。

「ん？」

つなげてみると、何かのマンガに見えなくもないぞ。ぱらぱらマンガかな。絵をページずつ見ていると、だんだん分かってきた。星に乗った王様が、部屋で寝ている男の子をよんでいる。まどの外から。男の子はそれに気づいて、まどを開ける。すると、いきなりつれていかれちゃうんだ。

「へーっ、うまくできてるもんだな。」

ぼくはベットのそばに本を置いて、いつの間にかねむってしまった。

「コンコンコン。ドンドンドン。」

「セシル！セシル！」

「なんだ？」

声のする方を見てみると、変な格好の男の子が立っている。頭にかんむりをつけて、王様みたいだ。ぼくは、まどを開けた。そして、ギョッとした。なんと、その男は、星に乗って、ういているんだ。

「お、お前はだれだ！」

「話は後でしましょう。ささっ、早く乗って。」

その変な男は、いきなりぼくのうでをつかむと、そのまま飛んでいったんだ。

家が見えないほど小さくなった時、その男は、ふわふわした地面の上に、ぼくをおろした。ぼくは、何が何だか分からなくて、わめきちらしていたんだ。すると、男が、ぼくに言った。

「びっくりさせて、すみません。実は、あなたに頼みたいことがあるんです。」

「えっ？」

「まあ、聞いてください。私は星の国の王です。それで……」  
「あー、ちょっと待って。あなたの言っている事は全然分からない。」

「あつ、そうか。すみません。最初からしっかり説明します。」

「ここは、夜の世界です。夜の世界には、二つの国があります。『星の国』と『月の国』です。私は星の国の王です。」

「月の国とは、昔から仲が悪く、ケンカばかりしていたのです。」

ある日、月の国のへいたい達が、王の命令で、星の国の星達をさらってしまったのです。そして、星達を王のけらいに……」

星の国の王は、なみだぐんでいた。

「そうか。で、ぼくは何をしたらいいの？」

「おお、助けてくださるのですか。月の国にさらわれていった星達を助けてほしいのです。」

「なぜ、ぼくが？」

「おお、よくぞ聞いてくださいました。私はどうすれば助けてくださるお人をさがせるのか、よく考えたあげく、ある図書室にかくれました。たなの奥に。こんな所に目をつける人、その人は、好き心にあふれた、ゆうかななお人じゃないかと思い、本にかくれ、待つていたのです。すると、あなたが、私を見つけてくださいました。」

「なんだか変な考えだけど、ぼくはほめられているみたいだし、まあ、いいか。助けてあげる。で、どうすればいいの？」

「はい、月の王は、まん月になる前に、一度出かけます。地球では、新月とかなんとか言うようで……。」

「うん、うん、それで？」

「月の王は、三日たつと、出かけから帰ってきます。地球では……。」

「うん、三日月って呼ばれている。」

「はい、三日月です。その三日の間に、星達を助けてほしい。」

助け方は、かんたんです。星達は、月の王が、出かけている三日間、にげぬよう、おりにとじこめられています。そのおりのかぎを開けて、星をにがしてくださいればいいのです。」

「かぎとかないの？」

「あることは、あるんですが……。このかぎが、おりのかぎかどうかわかりません。」

「どういうかぎなの？」

「これです。」

「えっ？」

「どうかなさったのですか？」

「それ、本だよ。しかも、ぼくが図書室から借りてきた本じゃないか。」

「ああ、でもこれは、ちゃんとしたかぎですよ。これを、おりにぶら下がっている板に押しつけてもらえば、すぐにおりのとびらは開きます。」

「そう。でもそんなかんたんな事、三日の間にすぐできるじゃないか。」

「星達がこの夜の世界ににげるには、ずいぶん時間がかかるんですよ。なんてったって、広いですからね。」

「そうか……。分かった。」

「では、これから王は出かけます。この本を持って、南に行ってください。」

「うん。必ず星達を助けるからね。」

「お気を付けて。」

ぼくは、ふわふわした地面を、南に、南にとずんずん進んで行った。

「もしかして、ぼくは、雲の上を歩いているのかな。」

なんて、のんきな事を言いながら、歩いてみると、遠くにとりかごみたいなものがある。それより、けっこう大きい。

「なんだろう？も、もしかして？」

ぼくは、大急ぎでその鳥かごに向かって走って行った。

「やっぱり！星達だ。」

ぼくが、おりの前に行くと、星達は、とてもびっくりしていた。ぴかぴか光って、ピーピー鳴いている。

「大丈夫。ぼくは、君達を助けにきたんだよ。これからすぐ、とびらを開けるからね。」

星達は、しばらくとよどしていたが、代表のような星が、おりの中から、ぼくをじっと見て、にこっと笑った。すると、

周りにいた星達も、にこにこ笑って、ぴかぴか光った。

「さっ、かぎを開けるね。」

ぼくは、さっきの本を星達に見せた。星達は、その本をまじまじと見つめ、こくっとうなずいた。なんだろう？と思って

いると、星は、ぼくに手招きしているようだ。ま、星達は手がないから、ずいぶんへんてこな手招きになったけどね。ぼ

くが、星達が手招きしている所へ行ってみると、そこには、糸でつり下げられた古い板があった。

「これだ！」

ぼくは、一つ深呼吸すると、本をしっかりとにぎりしめ、板の所にゆっくり押しつけた。

「びかっ。」

強い光が、板と本の間から出てきたと思うと、しゅんと急に消えてしまった。その時だった。一つの星が、

「ピーピーピッピッピー。」

と、大声で鳴き始めた。その星のほうを見ると、星が何かを教えている。

「ギギーギギー。」

にぶい鉄の音が聞こえた。そして、おりのとびらが、開いたんだ。おりの中にある星達は、大さわぎだ。みんないっせいに、おりの外へ出て、わになっておどりだした。

「早く、みんなにげて！遠くににげるんだよ。気を付けてね。月の王なんか、つかまっちゃだめだよ！」

ぼくが言うと、星達は、みな、おもしろい、どこかへとびさっていった。

「はっ！」

ぼくが、気づくと、ベットの上だった。時計を見ると、夜中の一時だ。

「夢だったのかなあ……」

ぼくは机の上の本をとった。何気なく開いてみると、

「ああっ！」

なんと、そこには、こう書かれていたんだ。

『あなたこそ、夜の王！星達は自由だ！』

ぼくはうれしくて、うれしくって、それからねむれなかつたよ。これでも夢だと思っ?

次の日からぼくは、どつどつと教室で本を読むようになったよ。ああ、それから、あの本は、机の引出に大事にしまつてある。君、夜、星達を見てごらん?どれもみんなバラバラに、自由にかがやいているだろう?それは、全部ぼくの手がらさ!

えっへん!

「キーン、コーン、カーン、コーン。」

おつといけない!昼休みが終わっちゃう!次は体育だよな。図書室にかくれよつと!君もいっしょにおいでよ!もしかしたら、また、おもしろい冒険に、出会えるかもしれないよ。